

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

氏名 森本 一夫

イスラームの預言者ムハンマドの血をひく子孫は、サイドまたはシャリーフと呼ばれ、その血統ゆえにムスリム社会でしばしば特別な地位を与えられ、多くの特権を享受してきた。それゆえ、彼らの系譜を確定し、誰がサイドやシャリーフであるのかを特定するために、中東のムスリム諸社会では、10世紀以後今日に至るまで多くの系譜文献が編纂されてきた。

本論文は、退屈な名前の連なりにすぎないと見なされ、これまで歴史研究の史料として活用されることのなかったこの一群の系譜文献に注目し、これらがなぜ、また、どのようにして編纂されたのか、さらに、社会的にいかん利用されていたのかを検証したものである。第一部では、10世紀の誕生から15世紀に至る系譜学の系譜と主要な系譜学者の業績が紹介され、第二部では、系譜学者とはどのような人物であるべきで、実際にはどのように修行を積んで系譜文献を編纂したのかが説明される。次いで第三部では、系譜台帳を管理し、サイドやシャリーフを統率することが期待されたナキーブという職の発生の政治的・社会的事情やこの職について人々の経歴、彼らによる系譜統制の方法などが解説される。そして、現実の社会の中でのサイドやシャリーフについて論じた第四部では、サイドやシャリーフの血統が建前としては系譜学者の証言によって決定されたが、実際には世論の動向に大きく左右されていたことが指摘される。

イスラーム世界史研究の分野では、これまで、年代記類や地方史、地理書を主たる史料とする政治史研究や各種公文書を用いた経済史研究に重点が置かれ、社会史研究の成果は乏しかった。これは、史料の残存状況によるところが大きいのだが、本論文は、新しい史料類型としての系譜文献を活用することによって従来の陥穽を突破し、豊かな社会史的成果を生み出している。また、本論文で明らかにされた多くの事実は、随所で従来のイスラーム世界史やイラン史解釈の再考を迫っている。例えば、スンナ派對シア派という二項対立を当然のこととするイスラーム世界史や現在のイランという枠組みを自明のものとするイラン史の叙述は、本論文の成果を考慮に入れて、大幅に書き換えられねばならないだろう。このように、本論文は、限定された分野における精緻な文献学的研究、社会史的成果であるだけでなく、従来のイスラーム世界史研究全体に大きな影響を与える優れた業績である。また、本論文で得られた系譜学や系譜学者に関する知見は、今後前近代ムスリム諸社会の特徴を考える際に常に参照されるべき堅実で基礎的なデータとなるはずである。

4つの有用な付録もあわせると、400字詰原稿用紙に換算して1500枚を優に超える巨冊であるにもかかわらず、叙述は平明で読みやすく、論理の展開も明快で無理がない。以上から、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。